

狐の嫁入

野村胡堂

「親分、面白い話があるんだが——」

ガラッ八の八五郎は、木戸を開けて、長んがい顔をバアと出しました。

「あ、驚いた。俺は糸瓜へちまが物を言つたかと思つたよ。いきなり長い顔なんか出しやがつて」

錢形平次は大尻端折の植木の世話を焼く恰好で、さして驚いた様子もなく、こんな馬鹿なことを言うのです。それが一の子分ガラッ八に対する、何よりの好意であり、最上等の歓迎の辞であることは、ガラッ八自身もよく心得ておりました。

「ジョ、冗談でしよう。糸瓜が物を言や、唐茄子とうなすが淨瑠璃じょうるりを語る」

「面白い話てえのはそれかい、八」

「混ぜつ返しちやいけませんよ。親分が糸瓜に物を言わせるから、あっしは南瓜かぼちゃに淨瑠璃を語らせたんで——」

「大層こんがらがりやがつたな、——ところでその面白い話てエのは何だい」

平次は縁側に腰をおろすと、煙管の雁首がんくびで煙草盆を引寄せました。

あまり結構でない煙草の煙が、風のない庭にスーッと棚引くと、形ばかりの糸瓜の棚に、一朶だの雲がゆらゆらとかかる風情でした。

「狐の嫁入なんですがね、親分」

お伽話ときばなしの筋なら知つてゐる

「そんな馬鹿馬鹿しい話じやありませんよ。何しろ町中の物持が大概やられたんだから、この筋書は容易じやありませんよ」

「独りで呑み込まずに、さつさとブチましてしまいな。狐の嫁入がどうしたんだ」

平次も少し乗気になりました。この話はどうやら筋になりそうです。

「ツイ十日ばかり前から、荒川堤ハラカワダムで狐の嫁入がチョイチョイおこなわれるんですよ」

「おこなわれるは変だね」

「最初はちょうどこの月の始め、雨のショボショボ降る晩でした。戌刻半ごろ小台の方から堤ハマの上に提灯が六つ出て、そいつが行儀よく千住の方へ土手を練つたんで、川向うの尾久オカは祭のような騒ぎだったそうですよ」

「川向うが騒いで、小台の方じや騒がなかつたのかい」

平次は早くもガラッ八の話の中から疑問をたぐりました。

「そこですよ親分。尾久の方からは、川向うの土手を、提灯が六つゆらりゆらりと練つて行くのが見えるが、土手下の小台の方からは、たつた一つもそんなものが見えなかつたというから不思議じやありませんか」

「ホーム、器用なことをするおコンコン様だね」

「王子が近いから、いざれ装束稻荷ショウヅクの眷族ケンゾクが、千住あたりの同類へ嫁入するんだろうてえことでその晩は済んだが、驚いたことにそれから三日目の晩、また雨のショボショボ降る日、こんどは先のよりでつかい狐の嫁入があつたんです」

「どうしてでっかいと解った」

「その時は提灯が倍の十二でさ、土手を十二の提灯が行儀よく練るのが川に映つてそりや綺麗でしたよ」

「お前はそれを見ていたのかい」

「あっしが見たのは三度目での」

「三度もあつたのかい」

「だからお話になりますよ。——それから五日目の昨夜、昼頃から^{あつづ}眺えたようなショボショボ雨になつたでしょう」

「フレーム」

「尾久の友達が前から、打合せてあつたんで、大急ぎで出かけました。こんな晩はまた狐の嫁入があるかも知れない、なかつたら向う川岸を眺めながら、夜つびて飲もう——てえ寸法で」

「呆れた野郎だな。その友達というのは誰だい」

「尾久の喜八で、いい年をして居るくせにろくな捕物をしたことはないが、酒は滅法強い」

「何んて口をきくんだ。それから何うした」

平次はこの狐の嫁入話が、すっかり気に入つた様子です。

「待つほどに酔うほどに」

「気取らずに筋を通しな」

「何しろ日が暮れる前からやつて居るでしょう。亥刻^{よつ}近くなつて、好いかげんトロリとしていると、川向うにチラと明るいものが出て来た」

「——」

「喜八の家は坐つていて釣の出来るのが自慢で、川向うの狐の嫁入見物には、これほど結構な棧敷^{さじき}はない」



「それからどうした」

「ショボショボ雨の向う川岸へ出た提灯の数は、何んと今度は三倍の十八じやありませんか。それが六つずつ三つになつて、行儀よく千住の方へ練ねるから見み物ものでさ」

「お前はそれを黙つて見ていたのか」

「その辺に舟はなし、川へ飛込んだところで、親分が知つてなさる通り徳利でしよう。仕方がないから指をくわえて、喜八と二人であれよあれよ」

「間抜けだなアー、何んだつて宵のうちから向う川岸に廻つて、狐の嫁入を見極めなかつたんだ」

「向う川岸の小台の方からは、提灯が一つも見えなかつたといふから不思議じやありませんか。——小台の衆は、尾久の奴等は臆おく病びようだから、そんな物を見るんだろうと言うと、尾久の手合は口惜

しがって、何を小台の寝^ね呆け野郎——という騒ぎで、こいつは何時まで囁み合せても埒^{らち}はありませんよ。幸いあつしがこの眼で見たんだから、狐の嫁入が本当に通ることには間違^{しま}いありません」「話はちょいと面白いが、それつきりじや仕様がない。お狐にしちゃ手数がかかるから、いずれは誰かの悪戯^{いたずら}だろう。提灯屋が喜ぶだけの事さ」

平次は軽く片付けて、もとの植木の方へ、注意が外れて了^{しま}いそうです。

「親分、話はこれからですよ」

ガラツ八は乗出しました。低い鼻が少しばかり蠢^{うご}めきます。

二

「たいそう手数のかかる話じやないか。早く筋をブチまけて了^{しま}いな」

平次は不精無精の顔をネジ向けました。

「狐の嫁入見物で、どの家も空っぽになつたところへ、空巢^{あきす}狙^ねいが入つたんで」

「なんだ、そんな事か」

「物持と思われる家は、大抵やられましたよ。尤も動けない老人や病人が仕様事なしに留守番をしている家は助かりましたがね」「たいそう手数のかかる空巣だが、余つほど盗られたのか」

「盗られた家は七八軒。金は田舎のことだから、五両か十両でしょうが、品物は随分やられましたよ」

「三代前から伝わった紋附といつたような品だろう」

「それから生物——」

「牛かい、馬かい」

「人間なんで」

「人間?」

「清水和助という町一番の大地主で、苗字まで名乗る家の掛り人みょうじかか、お夏うどという十八になる娘が盗まれましたよ」

「フーム」

「あつしが見たわけじやありませんが、綺麗な娘だつたそうですよ」

「それから」

「それつきりで、尾久の喜八も、——こいつはこちとらの手に了おえないから、錢形の親分にお願いするようについて」

「それで尾久から飛んで来たのか」

「ヘエ——」

「馬鹿だなア、そんな事は尾久で調べ上げれば、半日で解るのに」「半日や一日じや解りませんよ」

「急所を外れるからいけないんだ。例えはあの辺から江戸へかけて質屋しちやを張らせるとか、提灯屋ぢとうやを当つて見るとか」

「喜八の子分が暗いうちに手を廻しましたよ」

「提灯を十八も揃えるには、一人で二つずつ持つても、九人の手が要るだろう。多勢組んでいる悪者を捜し出せば、思いの外早く埒があくじやないか」

「九人組なんて大袈裟おおげさなのはありませんよ」

「他に手の付けようがあるものか。——尾久の喜八兄哥あにいが宜いようにするだろう。放つておくが宜い」

銭形の平次は余り相手になりたくない様子です。

「でも、親分。喜八は飲みつ振りも、気前も良い男ですよ」

「呆れた野郎だ。いやに喜八兄哥の肩を持つてると思ったら、そんな事なのか」

「頼みますよ、親分。せつかく喜八があんに言うんだから」

「じゃ手前だけ行つて見るが宜い。どうしても手に了えなきや、その時俺が行つてやろう」

尾久まで乗出すのは、さすがに気がさしたか、平次は容易に御輿こしをあげようともしません。

ガラツ八は強たけつてとも言い兼ねた様子で、そのまま引返しました。

それから二日、紛まぎれるともなく御用にかまけて紛れでいると、

「た、大変まきッ、親分」

ガラツ八の大変が鬚節まげぶしを先に立てて舞い込んだのです。

「何をあわてるんだ。——尾久から大変の百万遍をやつて来たんじやあるまいな」

「親分、落ち着いていやいけませんよ。大変な事が始まつたんだ。あつ喉が涸かわく、水を一杯——」

「お静ておけ、八が水を欲しいとよ。そんな小さい茶碗で間に合うものか、手桶ておけごと持つて来るが宜い。——さア、いつたい何が大変なんだ、話してみるが宜い」

「人間が二人やられて、その上清水の息子が行方不知しれずになりましたよ」

「成程そいつは大変だ。詳くわしく話して見ろ」

「詳しくにもざつにも、これつきりですよ。村のあぶれ者で、小

博奕^{ばくち}と強請^{ゆすり}を渡世^{わせ}のようにしている照吉と伊太郎^{いたろう}というのが、尾久の土手で斬られて、ひどい死様で――

「フレーム」

「その晩、地主の清水和助の一人息子、清次郎^{きよつら}という糀粉^{しんこ}で揃え^{こさ}たような息子が行方不知になつたんで」

「ゆうべは狐の嫁入はなかつたのか」

「あいにく雨が降らなかつたせいか何んにもありません。尤も^{もつと}狐の方でも三人娘を嫁にやつてあとは品切れになつたのかも知れませんがね」

「無駄を言うな、とにかく行つて見ようか、少し遠いが」

「有難てえ、そう来なくちゃ――」

ガラツ八の八五郎は、額を叩いて先に立ちました。神田から尾久まで二里に余る道ですが、斯う調子づくと、八五郎は調法なことにほとんど疲れを知らぬ人間です。

三

尾久の土手へ行つて見て、さすがに平次も驚きました。田舎のことでの検屍の手が廻らないのか、二人の死骸^{むしら}は筵^{ひた}を掛けたまま、土地の御用聞の喜八が頑張つて、一生懸命弥次馬を追つ払つておりますが、まだ八州の役人も顔を見せず、江戸の御用聞の平次が來ても、遠慮しなければならぬほどの人間は一人もおりません。

「お、錢形の」

喜八の顔には、救われた者の喜びが漲りました。

「尾久の兄哥^{あにき}、久し振りだつたな。相変らず達者で良いね」

「達者なのは口と酒ばかりだ。見てくれ、この通り血の海だが、俺じや手の付けようはねエ。八州の役人が来ないうちに目鼻を付けなきや、又うんと小言を言われるだろう。それに他の御用聞に嗅ぎ出されて、馬鹿にされるのも業腹だ。錢形の兄哥なら——」

喜八がそう言うのも無理はありません。千住の先は江戸の町奉行の管轄でなく、言わば平次は縄張り違いですが、この老御用聞を救ってくれるのは、功名に恬淡な平次の外にはありそうもなかつたのです。

尾久の喜八は土地に根を生やした良い顔には相違ありませんが、喧嘩の仲裁、もめ事の調停なら知らず、むづかしい捕物となると全くの苦手で、血を見るともう手も足も出ないような、御用聞離れのした男でした。八五郎を拝んで、平次を引出したのは、土地の仲間にこの功名を譲つて行かれ度くないばかりの苦策だったのです。

「それじや、ちよいと覗かして貰おうか。成程こいつは?」

平次は筵を剥いで見て驚きました。照吉と伊太郎はどっちも三十五六、典型的な安やくざですが、実に眼も当てられぬ凄まじい死にようをして居るのでした。

わけても伊太郎は全身数十カ所の傷を受け、最後に左の胸を突かれたのが致命傷で、膾のようになつてこと切れ、照吉はほんの二三カ所のかすり傷を受けただけ、その代り見事な袈裟掛けに斬られて死んでおります。

「錢形の兄哥、もうお役人の見える頃だ。この場の恰好だけでも付かないものだろうか」

喜八は独りで氣を揉んで居りました。

「待ってくれ、——この場の恰好だけなら、何んとか付くだろう。その代り後で様子が違つても構わないだらうな」

「構わないとも」

「もう一つ、念のために二人の懐を洗つてくれ。金は持つて居ないだらうと思うが——」

「不斷百も持つていらない人間だが、この二三日馬鹿に景気がよくて、伊太郎などは近在の賭場とばを門並み荒して歩いたそうだよ。——何んでも金の実かなる木を植えたとか言つて」

「ところが、伊太郎は財布さいふも紙入も持つちやいねエ」

「おや、変なことがあるものだね、錢形の」

「大方そんな事だらうと思つたよ」

「——」

そんな事を話しているところへ、土地の御用間に案内させて、檢屍の役人が乗込んで来ました。

「ひどい事をするな。——下手人の目星は付いたのか、喜八」

役人も現場むごたの虐らしさに、ひどくタジタジとなつております。

「へエー、大概見当は付いた心算つもりでございます」

喜八は平次に教えられた通り、ひどく簡単に答えました。

「どう付いたんだ」

「伊太郎と照吉は無二の仲でしたが、近ごろ伊太郎が何にかで儲もうけた様子で、パツパして居りました。多分ゆうべここで出でつ逢くわわして、照吉が無心を吹つ掛け、それを聴かなかつたので喧嘩になつたのでございましよう」

「フレーム」

喜八の鑑定の要領のよさに、役人も、役人といつしょに来た御

用聞たちも釣り込まれてしましました。

「二人はここで、人交えもせずに斬り合って居るうち、伊太郎の斬った刀と、照吉の突いた刀とが一緒になり、相討ちになつて死んだものでございましょう。その証拠には、二人の長脇差はこの通り血だらけで、一間とは離れずに死んでおります」

「フム」

「もし、誰か他の者が、この二人を斬つたとすれば、これだけの傷をつけたんですから、うんと返り血を浴びたことでしょう。その辺にマゴマゴしておればすぐ知れてしまいます。土地者には、この二人のあぶれ者と一緒に相手にして、見事に斬り伏せるような、そんな腕の立つ人間はありません」

喜八の説明はいかにもよく行届きます。それを口移しに教えた平次は、八五郎といっしょに役人達に背を見せて、群がる弥次馬を追つ払っております。

四

「有難てえ。これで俺も坊主にならずに済んだよ、錢形の」

役人と、役人について来た二三人の御用聞の後ろ姿を見送つて、尾久の喜八はホツとしました。

「その代り、これからが大変だよ、喜八兄哥」

平次は引返してもういちど二つの死骸をあらた検めております。

「大変というと？」

「下手人を捜すんだよ。——それから狐の嫁入を仕組んだ野郎と、泥棒と、人さらいと」

「二人は相討で死んだんじゃないのか」

喜八の鼻はキナ臭く動きました。

「それは兄哥の顔をつぶさないようにこの場のがれの言い訳さ。相討なんかじやない、立派な下手人があつたんだ」

「誰だい、そいつは」

「あわてちやいけない。俺は江戸の町方の御用聞だから、八州の役人が頑張って居ちや、いくら兄哥の手伝いでも仕事が出来ない。こう追つ払つて置いて、それから仕事をはじめるのさ」

「へエ——」

平次の話の意外さ、喜八はすっかり胆きもをつぶしてしまいました。「第一、昨日まで恐ろしく景気のよかつたという、伊太郎が百も持つちやいないだろう」

「フーム」

「小判は愚おろか鏃錢びたせん一枚入った財布を持つちやいない。照吉の方は財布は持つて居るが一文なしだ」

「——」

「二人が死んだ後で、誰か伊太郎の懷ろを抜いたに違げえねえ。が、こんな虐むごたらしい死骸から財布を抜くのは通りすがりの人間でない事は確かだ」

「なるほど」

「それに、伊太郎の傷は前から突いた傷だが、照吉は後ろから大袈裟おほげさに斬られている。背の方が深く斬下げられているし、前は刃先が浅いから、こいつは間違いはない。こんな具合に前から斬るために、踏台ふみだいでもしなきやなるまい」

「フーム」

「伊太郎は自分の胸を突かれながら、踏台をして照吉の肩先を斬り下がたか。——照吉が大地に坐って肩先を大袈裟に斬られながら、伊太郎の胸を突いたか」

「すると、どんな事になるんだ、錢形の」

喜八はすっかり圧倒されて了しました。

「照吉は伊太郎より、ぐんと腕が上だろう」

「その通りだ。二人が相討になつたと聞いて、照吉の野郎よっぽど運が悪かつたろうと思つたよ」

と喜八。

「照吉はほんのかすり傷を受けただけだが、伊太郎は滅茶滅茶に斬られている。たぶん照吉は伊太郎の胸を一と突き、——首尾よく片付けてしまつてほツとしたところを、誰かに後ろから袈裟掛けに斬られたんだろう」

「なるほどその通りだ」

平次の説明は痒いところへ手の届くようでした。

「それだけは解つたが、照吉を殺して財布を抜いたのは誰か。それをこれから搜さなきやなるまい」

「?」

「養い娘を誘拐された上、息子が行方不明になつたという、地主の清水のところへ行つて見ようか。——八、お前は喜八兄哥の身内の衆に案内して貰つて、土地の質屋と両替屋を片つ端から調べてくれ。品物は隠して置くかも知れないが、空巣稼ぎで金を盗んだ奴は、三日と費わずにいる気遣いはねエ」

「ヘエ——」

八五郎は喜八の子分を二三人狩り出して、八方に散りました。

二つの死骸はもう検屍が済んで、町役人に引渡したのです。

五

清水和助というのは、尾久の半分ほども持っていると言われた大地主で、先代は苗字^{みょうじ}帯刀^{じたいとう}を許されたほどの大百姓ですが、和助は養子で、早く女房に死に別れた上、なんの因果か子供運がなく、たつた一人の男の子で、二十三になる清次郎というのを、杖とも柱とも頼む贅沢なうちにも淋しい生活でした。

尤も親類から預つたお房という二十歳の娘があり、世間ではそれを清次郎に娶^め_{あわ}させることとばかり思い込んで居りましたが、どうしたことかそんな様子もなく、半年ほど前から清水家に掛り人になつてゐる、お夏という十八になる娘と、この秋は祝言させるということに話が決つてゐるのでした。

「江戸の町方のお方?——そうですか。私は和助、伴の行方を突き止めて下すつて、無事に戻りさえすれば、お礼はどんなにでもします。どうぞ、一骨折^{ひと}つて見て下さい」

主人の和助は、喜八、平次の二人を迎えてこんな事を言うのです。五十前後の脂^{あぶら}の乗つた中老人で、物欲の旺盛^{おうせい}らしいのと、何事も金で始末の出来ないものはないと思い込んでいる様子で、ひどく平次の瘤^{がん}にさわります。

「養い娘のお房さんというのがあるのに、どうして、そのお夏さんというのを嫁にすることになつたんです」

平次の最初の問いはこう言つたものでした。

「お夏の父親は私の昔の友達で、恩がありますよ。それに、伴が

お夏でなきやと言うので——

和助の顔には苦渋の色がアリアリと刻み付けられました。

「そのお房さんとやらに逢わせて下さい」

平次はこの欲の深そうな主人と長く話して居るのが爵陶しくなった様子です。

お房というのは二十歳というにしては少し老けた方で、決して綺麗ではありませんが、何んとなく智的な感じのする娘でした。

「お前さんはお房さんというんだね」

「ハイ」

お房は淋しく俯向きました。

「この家とどんな係り合があるんだ」

「私は旦那様の甥の娘で、遠い親類ですが小さい時両親に別れて、ここに引取られました」

「主人はよくしてくれるだろうね」

「それはもう」

弁解するような調子のうちに、何かしら悲しい語氣が潜みます。髪形ちも着ているものも、至つて質素で、若いにしては智的に見えるのは、そのためだつたかも知れません。

「お前さんはここ嫁になる筈じやなかつたのか」

喜八は遠慮のない事を言いました。

「いえ、飛んでもない」

「すると、お夏が嫁になつても、不服はないわけだね」

「——」

お房はうなづきました。

それから平次は主人の部屋、お夏の部屋、伴の部屋などを見せ

て貰い、物置と納戸と土蔵まで念入りに調べさせて貰いました。

「まさか土蔵に隠れているような事はあるまい」

と喜八。

「人間は隠れちゃいないが、——俺は提灯の数を勘定したんだ」
平次は変なことを言います。

「提灯がどうしたというんだ」

「これ程の大家に提灯が二つしかないのを変だとは思わないか、
あにき兄哥」

「そう言えばその通りだが——」

「狐が持出したかも知れない。とにかく、提灯を掛ける釘が十三
遊んでいるよ」

二人は雇人やといにんたちに逢つて、お夏の身の上のことを訊きましたが、
誰も詳くわしく知つてる者はありません。

「親分」

清水の門を出ると、不意に声を掛けた者があります。

「あ、与三松か」

喜八は鷹揚に挨拶しました。相手は四十年輩の堅気ともやくざ
者ともつかぬ男。

「ちよいとお耳に入れたいことがあります」

「ここで言うが宜い。——この人は俺の友達だよ。構わないとも」
喜八は平次を友達にしてしまいました。幸い江戸を離れると、
神田の錢形平次あまり顔を知られてはいません。

「外じやございませんが、——行方不知しれずになつた清水さんの掛り
人のお夏という娘のことを、何うかしたら、浪人者の大井半之助
さんが御存じじやありませんか」

「それはどう言うわけだ」

「親分は御存じじゃありませんか、——大井さんというのは、あの娘の後を慕つて、ここへ来た人ですよ」

「——」

「お夏さんの父親は清水の旦那の若い時分の友達で、昔は江戸でいっしょに仕事をしたが、清水の旦那はすっかり残して尾久に引込んでの^{しんしょう}身上を捨て、お夏さんの父親は、商売の縮尻から、二年前首を釣つて死んだという話ですよ」

「フレーム」

「その娘を清水の旦那が引取ると、浪人者の大井半之助さんが附いて来て、近所に家を借りて見張つているんです。大変な執心で

すよ」

「有難う。それだけ訊くと大変役に立つ、——一つその大井とかいう人に逢つて見ようか、兄哥」

平次はさつそく新しい手掛りをたぐりました。

「無駄だろうと思うよ。浪人者と言つても、生つ白い弱そうな武家で、朝から晩まで本を読んだり歌を作つたり、女のするような事ばかりしている男だ。若い娘を^{かどわか}誘拐したり、腕つ節の強いやくざを二人殺したりするような、そんなことの出来る柄じゃない」喜八は頭から相手にしません。

「でも、武家は心得がありますよ。弱いようでも、いざとなれば、こちとらの二人や三人はどうにでもなりまさア」与三松もなかなか主張がありそうです。

「じゃ行つて見るとしようか」

平次はその弱い武家に興味を持ち始めた様子です。

二人はすぐ近所にささやかな借屋住いをしている、浪人大井半之助を訪ねました。『弱い武家』で通っているだけに、二十五六の良い男ですが、華奢きやしゃで柔軟で、どう見ても人間かどわかを誘拐したり、やくざ者を斬つたりする柄とは思われません。

「お聞きでしようが、清水屋敷のお夏さんが行方不知になりました。旦那は前からお夏さんを御存じのようですが、お心当たりはございませんか」

喜八の言葉は丁寧ですが、抜差しならぬ言質つかを擰もうとする意気込だけは猛烈です。

「知らない。——何んにも知らない。それで実は私も心配しているのだが——」

読みきしの本も手に付かない様子、腕こまねを拱いて、青々した月代さかやきを見せます。

「お夏さんと、清水の旦那はどんな係り合いになつて居りましたよ

う

「その事ならよく知つて居る」

大井半之助の説明は長いものでしたが、一と口に言うと、今から二十五六年も前お夏の父石崎金次という浪人者と、今は清水の主人になつてゐる和助が、江戸で落合つて懇意こんいになり、木曾の御お留山とめやまを伐り出して巨万の暴富を積みました。

その後和助は尾久に帰つて清水の養子になり、持参金で財産を整理して、今日の大地主になりましたが、石崎金次はその後も清

水和助の資本でいろいろの仕事をつづけ、二三年前旧悪が露見して、千住の宿で自殺して相果てました。

石崎金次の死には、かなり疑わしいものがありました。娘のお夏はまもなく清水和助に引取られ、尾久の屋敷につれて来られて、和助の伴の清次郎が望むままに、嫁にすることになった様子です。

大井半之助は石崎金次の悪事を憎みながらも、その娘のお夏の美しさに引かされ、子供の時から親しくしておりましたが、お夏が尾久に引取られてからは、浪人者の氣樂さ、後を慕つてここへ移り住み、蔭ながらお夏の安否を見護つて居たのです。

「こんなわけだ。——これ以上の事は何にも知らない。お夏が逃げ出したものなら、自惚うぬぼれのようだが、この私のところより外に行く場所はない。ここへ姿を見せないところを見ると、多分悪者に攫さらわれたのであろう」

半之助はそう言つて暗然と頭を垂れるのです。

平次と喜八は浪宅を出て二三十歩行きましたが、フト平次は立止つて、

「どうかすると、あの家にいるかも知れない。行つて見ようか、兄哥」

「何んだい」

「まあ、見付けてからの事だ。この八卦けは当らないかも知れないから」

二人はもとの大井半之助の家へ引返すと、一応断つて、裏の物置を開けて貰いました。

「この物置は滅多に使うことはあるまいね」

平次は案内の婆やさんに訊きます。

「もと百姓家で使った物置だから、あんまり広くて役に立たねえよ。近頃は三月も開けたことがねえだ」

「そうだろう」

そう言いながら中へ入つた二人、

「あつ」

喜八は思わず声をあげました。広い物置の隅に、各種各様の提灯が十七八、蠟燭ろうそくも抜かずに滅茶滅茶に積んであるではありませんか。

「こんな事だろうと思つたよ。狐の嫁入の道具が、やはり川の此方にあつたんだ」

平次はそれを予期した様子で一向驚く色もありません。

「縛つかつてしまおうか」

喜八は呻ひしめきます。

「誰を？」

「知れたこと、あの弱い浪人者だよ」

「冗談じやない。自分が細工さいくした狐の嫁入道具なら、自分の物置へ隠しておくものか、あの浪人者を縛ると、飛んだ事になる」

「それじや？」

「もう少しあちこち歩いて見よう」

二人はまた川岸つぶちの方に取つて返すと、八五郎と下つ引二

三人が勝誇かちほこつた様子で飛んで來ました。

「親分」

「両替りょうがえした奴が判つたか」

「皆んな判りましたよ。それから蠟燭を買った野郎も——」

ガラツ八はすっかり弾はずみきつて居ります。

「なるほど、其処まで気が付けば大したものだ。ところで、そいつは、伊太郎か照吉か」

「あッ、親分も訊いて歩いたんで？」

「歩きはしないが、見当だけは付いているのさ」

「そんなによく解っているなら、あつしが汗を搔かくまでもないでしよう」

「まあ怨むな。足で取つた証拠でなきや、眞実の証拠にならない」

平次は八五郎を撫なだめながら、次第に川岸つぶちを遡さかのぼ上つて行きます。

「何を搜すんだ、兄哥」

と喜八。

「あれだよ」

「こいつは、清水屋敷の舟だが？」

平次の指さしたのはこの辺の川を渡すのに使う舟で、何の変哲もなく、岸の杭に繫つないであるのでした。

「この舟で渡つて、川向うの土手で狐の嫁入をやつたのさ」

「この小さい舟に九人も乗つたかい」

喜八はまだ狐の嫁入行列を九人以下ではないと信じている様子です。

「いや、たつた三人さ。その舟の中に三間以上の棹さおが三本もあるのは不思議だと思わなかいか」

「？」

「川舟の棹は大抵二本に決つたものさ。一本では流したとき困るが、三本は多過ぎるよ」

「その棹一本に提灯を六つずつブラ下げられるだろう。——最初の晩は一人でやつたから提灯が六つさ。二度目は二人でやつて、三度目は三人でやつた。三人の人間が銘々提灯を六つずつブラ下げた棹を持つて川向うの土手を歩いたから、此方から見る人間は驚いたわけだ。——それも雨のショボショボ降る晩に限つた。川向うの人達に見付けられたくないからだ」

平次の絵解きは奇抜ですが、今はもう何んの疑いもありません。「そう言えば提灯は六つずつ三ツ別々に揃つていたような気がする」

ガラツ八もその晩のことを思い出します。

「此方からだけ提灯が見えて、川向うの小台の方からは何んにも見えなかつたのはどう言うわけだろう」と喜八。

「俺には見当だけは付いているが、これも証拠がないからはつきりは言えない。——たぶん提灯一つに菅笠すげがさ一つずつ下げて、向う側へ灯の見えないようになしたんではないかと思う。どこかに菅笠を十八積んであるよ」

平次はそんな事まで考えて居るのです。

七

ここまで突き止めて、これから先はハタと行詰りました。

相変らずお夏と清次郎の行方は解らず、伊太郎と照吉の相棒の見当も付きません。

日が暮れると、一応喜八の家へ引揚げて、平次と八五郎と三人、

額を鳩めましたが、こうなると平次にもなかなか良い知恵が浮かばなかつたのです。

「たつた一つ術があるんだが——」

平次は言いたくないことを言う様子でした。

「何でもやつて見ようじゃないか、銭形の。考えがあるなら言ってくれ」

喜八は膝を乗出します。

「変なことを訊くようだが、この辺で俺の名前を知つて居る者はあるだろうか」

平次は恐る恐るこんな事を言うのです。

「神田の銭形平次兄哥を知らない者があるものか。顔を知らなくとも、名前だけは子供でも知つて居るよ。身に覚えのある野郎は、銭形と聴いただけでも身み_{ぶる}顫ふるいする」

気の良い喜八は立てつづけにこんな事を言うのです。

「そんなにおだ煽おたてちやいけない。じゃ——喜八兄哥の言うのを半分に聞いて、いよいよたつた一つの術に取かかって見よう。——ここに居るだけの人数で、尾久一杯に触れ廻して貰いたいんだ」

「何を触れるんだ」

「——神田の平次が来て、下手人の目星めぼしが付いたそだから、明日は伊太郎照吉殺しも、お夏と清次郎の誘拐かどわかれ野郎も縛られるに違いないとこう言うんだ」

「本当かい、そいつは」

「まあ、本当に置いてくれ。——髪結床、居酒屋、出来ることなら村中の者皆んなに聽かせ度たい」

「そんな事ならわけがあるもんか。サアもう一度皆んなで行つて

くれ

「合点だ」

子分達はゾロゾロと出動して行きました。

「あっしは？ 親分」

残つたのは八五郎と喜八だけ。

「さて、一番怪しいと思うのは誰だろう」

平次は妙な事を言い出しました。

「浪人者の大井半之助だ」

喜八は言下に応こたえます。

「川向うで嫁入行列をやつたのは三人、その間に空巣狙いをやつたのと、お夏を誘拐かどわかしたのが一人か二人ある筈だ。——そのうち伊太郎と照吉は死んでしまつた」と平次。

「あと二人あるわけだね、親分」

「三人かも知れない。が、もう尾久には居ないだろう。一と晩五十両の仕事になれば、江戸から稼かせぎに來るのはいくらでもある」と平次。

「じゃ皆んな逃げたかもしないといふんで？」
八五郎は少しがつかりしました。

「いや一人だけは残っている。大事の仕事が残っている筈だ。——

「そろそろ出かけて見ようか」「何処どこへ——」

「ツイ其処そこだ」

平次は八五郎と喜八を誘さそつて闇の中へブラリと出ました。
五六丁行くと、清水屋敷の前へ出ます。

「八と喜八兄哥あにきはここで待つていてくれ。入る奴を縛っちゃいけない、出る奴を縛るんだ。誰でも構わない」

「親分は？」

「裏にいるよ。手剛てごわいから、怪我をしないように気をつけろ」

三人は二た手に分れました。

それから一刻ときあまり。

闇の中から湧いたような男が一人、清水屋敷の表からそつと入つて行つて、四半刻ほど経つと、もとの表口から四方あたりを忍ぶ様子でスルリと滑り出しました。

「御用ツ」

前後から飛び付いた喜八と八五郎。

「何をツ」

曲者は身を翻ひるがえすと、匕首あいくちを抜いて、猛然と反撃はんげきして来ました。

平次の注意がなかつたら、二人のうち一人は間違なくやられたことでしょう。

「神妙にせいツ」

危うくかわして、二人は呼吸を揃えて打つてかかりました。揉みに揉んで、漸く縛り上げたとき、平次は家の中から、

「どうだ、無事に捕つたか」

暢氣のんきそうに顔を出したのです。

「親分は」

「俺も一人縛つたよ、見るが宜い」

雨戸を一枚繰ると、部屋の中に、主人の和助を縛つて引据ひきすえているではありませんか。

「そいつは、親分」

「曲者の一人さ。——お前たちの縛つたのは和助の子分の与三松だ。高飛びの路用を強請ゆすった筈だから、懷には二百や三百の金を持つてゐるだろうよ」

「へエ——」

八五郎も喜八も開いた口が閉ふきがりません。

与三松を責めて、お夏は川向うの百姓家に隠してゐることが判り、清次郎は千住の与三松の仲間のところに隠してあることが判りました。

すぐ様川向うの百姓家へ行つて、蓑やつれ果てながらも、透すき徹とおるよう美しいお夏を救い出した時、念のために物置を見ると、どこから盗み溜めたか、菅笠すげがさが十八。

「あ、こいつだ」

ガラツ八は平次の慧眼にお辞儀をしてしまいました。

その晩のうちにお夏を浪人大井半之助に手渡してその保護に委ね、千住から和助の伴清次郎を救い出して、留守を預かるお房に引渡し、平次とガラツ八は尾久を去ることになったのです。

×

「親分、あの浪人者は喜んでいましたぜ」

帰る路々、ガラツ八はまた絵解きの緒口いとぐちをつくるのでした。

「お房も喜んでいるだろうよ」

平次は別の事を考へてゐる様子です。

「清水和助は、何だつて与三松なんかに強請ゆすられたんでしょう

ガラツ八にはまだ何んにも解つては居なかつたのです。

「お夏を与三松に誘拐かどわかさせたのさ」

「へエ——」

「斯うだよ、詳しく話そう。和助はお夏の父親の石崎金次と一緒に
によからぬ事をして金を溜めたが、悪事が露見しそうになつて、
今から三年前、与三松の手を借りて石崎金次を殺し、自殺と見せ
かけてお上の目を誤魔化した——それはいずれお白洲で解ること
だが。その後、自分の殺した石崎金次の娘お夏を引取つて、罪ほ
ろぼしの心算で養つていると、あの通りの縹緲だから、伴の清次
郎が夢中になつた。これは我儘いっぱいに育つた馬鹿息子で、何
んとしても親の言うことを聽かない」

「へエ——」

「和助は悪党の癖に気が弱いから、伴の言いなり放題に、お夏を
嫁にすることを承知したが、自分の殺した石崎金次の娘を、伴の
嫁にするのは何んとしても気が進まない。が、伴の清次郎はお夏
の側にへばり付いて半刻も眼を離さないから、どうすることも出
来なかつたのだ」

「——」

「丁度そのとき、狐の嫁入騒ぎが始まつた。悪党同士の推量で、
あれは与三松の悪戯に相違ないと睨んだ和助は、与三松に提灯を
貸してやつて、狐の嫁入をうんと大きなものにし、空巣狙いと一
緒に、お夏を攫わせることを思い付いた。あれだけの狐の嫁入が
始まると、清次郎もジッと女の番人はして居られない」

「なるほどね」

「清次郎が狐の嫁入を見物に出た後、お夏を首尾よくさらつた与
三松は、今度は、お夏の隠れ家を教えてやるからと、和助の伴の
清次郎をおびき出し、千住の仲間のところに隠して、和助を強
請つたのさ。金を出さなきや清次郎を殺すとでも言つたんだろう

「」

「俺の名をエラそうに触れるのはイヤだが、うつかりするとどんな事になるかも知れないと思つたからあんな術てを使つて与三松を和助のところへやつたのさ。大方見当は付いて居ても、証拠のないのを縛るわけには行かないし、責めさいなむのはイヤだからなア」

平次は何時でもそんな事を考えて居るのでした。

「伊太郎と照吉が殺されたのは？」

「与三松の細工さ。——お夏かどわかを誘拐した礼に清水和助から貰つた金が五十や三十あつた筈だ。それを与三松は腕つ節が弱いくせに欲の深い伊太郎にやつた。照吉は伊太郎から取上げようとし、伊太郎はやるまいとして斬あいになり、照吉は伊太郎を突き殺したところを、与三松は後ろから照吉を斬つて、懐ろの金を抜いた」「いやアな事だね。——ところで清水の身上しんじょうはどうなるでしょう」とガラッ八。

「いづれはお上で没収さ。ぼっしゅうだが、あのお房という娘は思いの外確しつかり者だから、結構清次郎を立てて行くだろうよ

「お夏ねたはあるの弱い浪人と一緒ですかえ」

「妬ねたむな妬むな、お前にはまだ良いのがあるよ」

平次はカラカラと笑いました。

江戸の街へ入るとすつかり夜が明けて、すがすがしい夏の朝風が頬を撫でます。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵——萩 柚月

初出——「オール讀物」昭和十五年八月号 文藝春秋社

底本——「錢形平次捕物全集」第六卷 河出書房 昭和三十一年七月三十日初版

編集・発行 錢形俱楽部



錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>